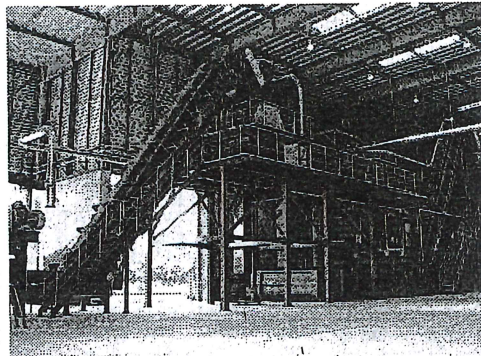


あおぞら

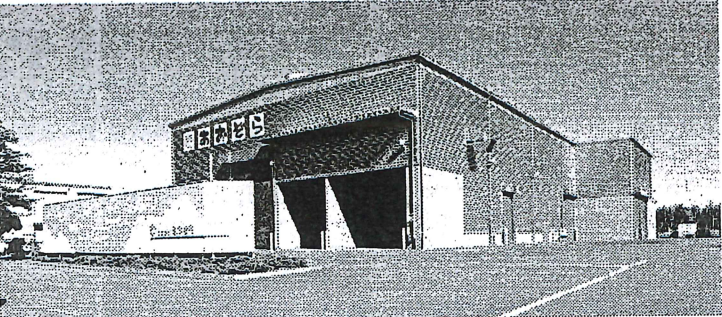
新工場が好調に稼働

RPFの多様化で需要に対応

茨城県で廃プラスチックなどの産業廃棄物を処理するあおぞら(茨城県つくば市、上甲龍也社長、☎029・8866・1731)は、新築した工場が大きな問題もなく好調に稼働していると明らかにした。主要事業である廃プラと紙くずなどをつくる固形燃料(RPFT)の製造事業では、需要家の要望に応えるために生産を多様化するなどの変化を続ける。従来の顧客への供給を重視しながら、RPFの新たな市場展開も状況に応じて検討する。



順調に稼働する製造ライン



あおぞら本社工場

同社は昨年2月の設を果たし、11月にRPFを増強中に発生した本F製造事業を再開した。F製造事業を再開した。生産ラインは当初の計画通りの従来から倍化し、24時間稼働が可能。な体制を継続。製紙工場などの需要家に安定した燃料供給を行う。

1日当たり最大で120トンのRPFの製造が可能だが、生産量よりも顧客の求める品質に合った製品を作ることを重視し、要望に応える。昨今では需要家によって硫黄分

や金属含有量など厳しい基準を設ける顧客も多く、成分調整をしたRPFをそれぞれで保管し、適切な燃料を納品している。

突発的に発生した災害廃棄物の受け入れも積極的に行って社会貢献に寄与するなど、周囲に受け入れられ、信頼される事業を展開してきた。定期的かつ高頻度な設備メンテナンスを行うことによつて、安定した操業が実現している。

新工場では現在、火災への対策としてさまざまな可能性を考慮しながら初期消火の迅速性を高めるために、無

廃プラ・容リ・古紙・事業系

郡山の農

キュリティーを強化し、消火器の設置数も倍増させた。今後は既存の水源地だけでなく、工業用水を利用した消火用の取水計画も検討。火災を発生させないための取り組みだけでなく、初期消火の徹底も重要だと認識している。

大戸一事務取締役は、「RPF製造事業では、廃プラなどの原料となる廃棄物は発生し続けるが、製品の納入量は需要家の必要数量に合わせて決まるところが難しい。昨今のRPFの認知度上昇を追い風にして、廃棄物処理業が担う社会的意義を全うするために安定した事業を継続したい」と述べている。

人になる工場の休止中には、警備員を配置するようにになった。さらに、工場建屋を全方位で監視するなど各種セ

2000年度までだった。地方農政局が報告徴収の再商品化

環境などのプロジェクト推進

帝人 鈴木社長がコメント

PETリサイクルに

帝人の鈴木純社長は8月2日の記者懇談会



鈴木純社長

で、今年6月17日に創立100周年を迎えたことをあげつつ、「未来の人を考え、人を中心に化学を考える会社として『FUTURE NAVIGATIO N』というグローバルメッセージを掲げ、人を超える環境やヘル

カーは、今年の最初は

廃プラは、異物が多

海に流れ出た海洋プラン75万ト

設操業
培もで
w.8up